

グレード別テキストを用いたピアノ演奏表現・技能向上の実践 —中等音楽教員に求められるピアノ演奏能力とは—

明和 史佳, 稲田 礼子, 海瀬 京子

Practicing for Improvement in Expression and Skills in Piano Playing with Graded Textbooks:
The Ability for Piano Playing as Required by Music Teachers in Secondary School

Ayaka MEIWA, Reiko INADA, Kyoko KAISE

2017年9月6日受理

抄 録

中等音楽教員には深い音楽知識と様々な音楽技能を身につけていることが求められている。特にピアノ演奏能力は、教育現場で最も必要とされる実技能力の一つであり、教員養成機関においてその能力の育成を図らなければならない。本研究では、教員に必要なピアノ演奏表現・技能とは何か明らかにするとともに、アンケートにより本学で学ぶ学生の現状を調査し、これまでの取り組みの成果と課題を考察した。また、2016年度入学生より一新したピアノ演奏学習の授業に焦点をあて、グレード別テキストを用いて学生が主体的に表現技能を高めるための授業の有用性を明らかにすることを試みた結果、学生それぞれの状況に合わせた学習計画を立て、個々に寄り添った指導をすることの重要性が示された。さらに、教育現場において重要な役割を持つ、ピアノ伴奏に関する学生の意識を調査し、効果的な指導方法を示した。

キーワード: 中等音楽教員養成、新学習指導要領、ピアノ演奏技能、ピアノ伴奏能力、
教員の資質

はじめに

常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻では、ほとんどの学生が小学校教諭免許状と同時に音楽の中学校及び高等学校教諭免許状の取得を目指し、勉学に取り組んでいる。小学校教員にももちろん音楽の授業を行うための基本的な知識と技能が必要であるが、中学校、高等学校の音楽教員に求められる音楽知識と技能は、それとは異なり、より専門的な知識と、高度な実技技能を身につけていなければならない。特にピアノ演奏能力は、歌唱や合唱、器楽の伴奏をはじめ、鑑賞や音楽作りの授業でもその主題をピアノで奏するなど、教育現場で最も必要とされる実技能力の一つである。ピアノ演奏能力といっても、ただ単にピアノが弾ける、伴奏ができるようになれば良いので

なく、音の美しさや音色の豊富さ、旋律の高まりやテンポの変化といった表現を深めるとともに、各時代の特徴や、作曲家、曲の構造や形式について知識を身につけ、曲にふさわしい演奏表現ができることを目指さなければならない。さらなる美しさを追求し、自身が表現したい演奏に近づけるよう研鑽を積むことで、音楽の素晴らしさを伝えることができる、「音楽教員としての資質」を身に付けることができるのである。

本学の音楽専攻では、入学試験で必ず実技試験を課しているが、入学生の経験度や習熟度にはばらつきがあり、同じく中学校・高等学校音楽の教員免許課程を有している音楽大学の学生と比べると、その音楽知識や演奏能力は十分なものであるとは言えない。また、先に述べたように中等学校教員を志望している学生も含め在籍しているほとんどの学生が小学校教員免許状を取得するため、全教科にわたる相当数の授業を抱えており、ピアノの練習に割くことができる時間が少ないのが現状である。本学では2016年度入学生よりカリキュラムが改められ、それに伴いピアノ演奏技能習得の授業内容も一新した。新授業では、グレード別テキストを用いて、学生が目標を持って主体的、計画的に学習に取り組めるようにし、限られた中でより効果的にピアノ演奏表現・技能を上達させることを目指している。本研究では、学習指導要領と教員採用試験の内容から教員を志望する学生に身につけさせたいピアノ演奏表現・技能を明らかにすると同時に、音楽専攻学生を対象に行ったアンケート結果から学生の現状を調査、旧カリキュラムで行ってきたこれまでのピアノ演奏能力育成の経過と成果から、新カリキュラムで目指すべき授業の取り組みと、指導のあり方について考察する。

(明和史佳)

I. 中等音楽教員が身につけるべきピアノ演奏技能

中等音楽教員にとって最も大切な技能の一つである、ピアノ演奏の能力であるが、本学のように音楽大学ではなく教育学部に属する学生の場合、どのように、またどの程度のピアノ演奏技能を身につけさせなければならないか、はっきり認識していることが重要である。教員志望の学生たちはプロのピアニストを目指しているわけではないため、多くの時間を一つのこと（例えばメカニク的なテクニックの鍛錬など）だけに割き、集中させるわけにはいかない。しかしながら、知識は有しているが、実際の演奏に生かされなかったり、演奏の楽しさや、その表現の奥深さを実感したことがないようでは、教員として十分な資質が備わっているとは決していえない。本章では、中等音楽教員に必要なピアノ演奏技能は、どのようなものであるか、新中学校学習指導要領と教員採用試験の実技試験内容から探っていく。

1. 中学校新学習指導要領から見る音楽教員に必要なピアノ演奏技能

平成29年3月に公示された中学校学習指導要領では、従来目標である音楽を愛好する心情や、音楽に対する感性、豊かな情操を養うことに加え、(1)曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。(2)音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。とよ

り具体的な目標が示された。各学年の内容においても、例えば2、内容A表現(2)のイ「次の(ア)及び(イ)について理解すること。(ア)曲想と音楽構造との関わり(イ)楽器の音色や響きと奏法との関わり」、ウ「次の(ア)及び(イ)の技能を身につけること。(ア)創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法、身体の使い方などの技能(イ)創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能」と、以前より具体的な目的を持った指導内容が示されている。曲想や音色、響きの美しさを生徒に感じさせるには、言葉で説明するよりも、実際に教員が曲の特徴にあった豊かな曲想を表現したり、様々な豊かな音色を奏でて聴かせることが最も効果的である。そうすることで、どうしたらそのような音色を奏でられるか、どうしたら魅力的な曲想を付けることができるか生徒が主体的に考え、試行錯誤しながら自ら少しずつ技能を身につけていくことにつながると考える。また、[共通事項]では、(1)ア「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。」と記されており、教員自身が音楽を形作っている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成など）を理解し、楽曲によってそれらをしっかり表現することができるピアノ演奏能力が必要であるといえる。

以上のことから音楽教員には、曲の構造や曲の時代背景などを理解した上で、その曲にふさわしい音色、曲想を持って表現できる演奏能力と技術を身につけている必要がある。また同時に、音楽の素晴らしさを伝え、美しい音楽を感じ取る豊かな感性も育まなければならない。

2. 教員採用試験から見る音楽教員に必要なピアノ演奏技能

次の表は、本学が位置する静岡県の平成27年度から平成30年度中学校教員採用試験（音楽）（高等学校音楽は募集なし）の実技試験のピアノ課題曲一覧である。

[表1] 平成27年度～30年度静岡県公立学校中学校及び小・中学校共通教員採用試験 音楽実技試験ピアノ課題曲

平成27年度	①ブルグミュラー 25の練習曲 Op.100 よりNo.25「乗馬」 ② J.S. バッハ インベンション第1番 ハ長調 BWV772 ③ M. クレメンティ ソナチネ Op.36 No.1 第1楽章
平成28年度	③ M. クレメンティ ソナチネ Op.36 No.2 第1楽章 ② J.S. バッハ インベンション第8番 ハ長調 BWV779 ③ L.V. ベートーヴェン ピアノソナタ第5番 ハ短調 Op.10 No.1 第1楽章
平成29年度	① W.A. モーツァルト ピアノソナタ イ短調 K.310 ② L.V. ベートーヴェン ピアノソナタ第6番 ヘ長調 Op.10 No.2 第1楽章 ③ F. ショパン ワルツ 嬰ハ短調 Op.64-2
平成30年度	① W.A. モーツァルト ピアノソナタ ト長調 K.283 ② L.V. ベートーヴェン ピアノソナタ第8番 ハ短調 Op.13 第3楽章 ③ F. ショパン ワルツ 変イ長調 Op.69-1

いずれの年度も3つの課題の中から任意の1曲を演奏するわけだが、平成27年度のピアノ演奏実技試験では、ソナチネやブルグミュラーといった、ピアノ学習の教本として使われる初歩的な作品や、バッハのインヴェンションの中でもよく導入として用いられる第1番ハ長調が課題であったのに対し、平成28年度にはブルグミュラーのかわりに、ソナチネよりも規模が大きい古典派のピアノソナタが加わり、平成29年度ではさらにソナチネが省かれ、モーツァルト、ベートーヴェンのピアノソナタの他に、新たにロマン派作品であるショパンのワルツが課題に加わった。平成30年度は29年度とほぼ同じ課題曲の傾向にあったが、この平成27年度から29年度の3年間の課題曲を比較すると、課題の難易度は年々非常に高くなっている。バロックからロマン派までの時代様式の楽曲が設定されていることから、初歩的な演奏技能だけでなく、作曲された時代にふさわしい演奏表現、作曲家の特徴や曲の特徴をとらえた表現が求められていることがわかる。また、速いパッセージや、連打を美しい音色ではっきり正確に奏するテクニックや、メロディーを歌うようにレガートで奏するテクニックなど技術的な面でも確実な力を身につけていなければならないことがいえる。

(明和史佳)

II. ピアノ授業におけるこれまでの取り組み

中等音楽教育においてピアノ演奏は大きな役割を持ち、授業を円滑に進める演奏技能を、教員は身に付けていなければならない。常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻では、2016年度入学生よりカリキュラムが改正されたことに伴い、これまでの成果や課題を生かし、より確実に演奏技能・表現を上達させることができるピアノ学習の授業を目指し、その内容を新たにした。この第II章では旧カリキュラムで学習してきた2015年度入学生の現3年生と2014年度入学生の現4年生の学習の経過と成果、また課題について考察する。

1. 授業内容

旧カリキュラムでは1年次から3年次まで、各セメスターの授業ごとに共通の課題を設け、その課題をこなすことでそれぞれの授業が目標とする技能の習得を目指してきた。また、4年次には各学生が大学4年間の集大成として、一年をかけて楽曲研究と演奏研究を行い、豊富な音楽知識とそれに裏付けられた高いピアノ演奏能力、豊かな音楽性を身につけた音楽教員の育成に努めている。授業は概ね4人のグループで、主に個人レッスンの形で進められる。しかし同じグループ内の学生は他の学生が指導を受けているのを観察することとし、自身の上達と、教員としての着眼点や、指導の仕方を積極的に学ぶように指導している。1年次から4年次まで継続的かつ段階的に学習することによって、さらに演奏技術を高め、演奏内容を深めて中学校音楽教育において十分活用出来る演奏技術表現を習得できることを目指す。また、毎回の授業内容をレッスンノートに記載し、復習、予習の参考にするように指導を行っている。

次に授業で取り扱う課題についてだが、1年次前期では、チェルニーなどのエチュー

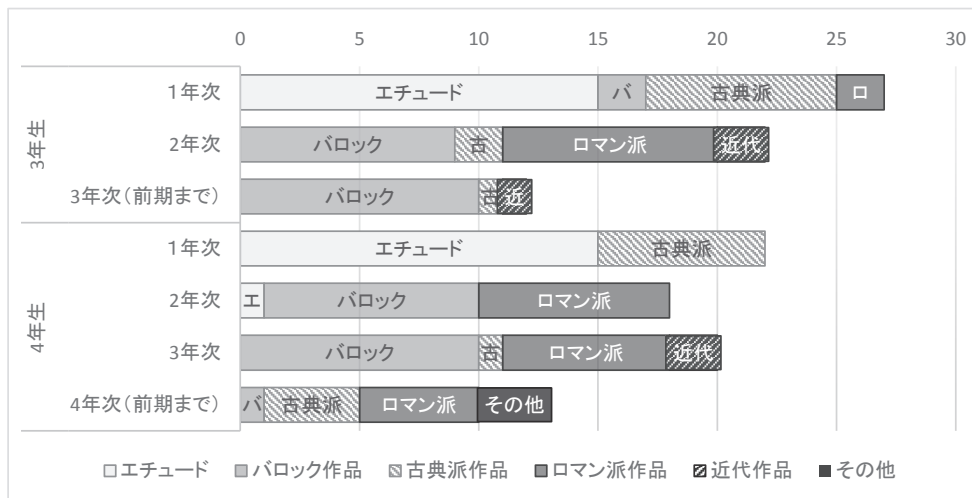
ドを課題とし、美しい音ではっきり打鍵するという基礎的なテクニックを身につけることを目標とした。後期では、前期で身につけた打鍵のテクニックを生かし、ベートーヴェンのソナタを学習、引き続き基礎的なテクニックを向上させると共に、古典派の特徴や形式、作曲家の特徴を表現することを学ぶ。また、1年次前期後期を通してハノンのスケール全調が演奏できるようになることを課題とした。2年次前期では、合唱指導をする上においても必要なポリフォニー音楽をバッハの課題で指導、後期にはロマン派の作品に取り組み、その演奏技術と演奏方法を身につけ、表現力を高めることを目指した。3年次の前期では、再びバッハを課題とし、後期では学生個々の習熟度に合わせた課題を選び、演奏技術を高めると共に音楽性豊かな演奏ができるように指導。同時に、お互いの音楽を聴き合い全体のバランスに配慮出来るように連弾の学習も課題としている。4年次では、3年次までに専攻科目全てで習得した音楽知識・技術を基として、さらに中学校音楽教育において十分活用出来る演奏技能習得を目的に指導し、ピアノ専攻学生は、11月学内演奏、1月卒業試験、2月学外での卒業演奏会を目標に10分程度のプログラムで楽曲を選び、技術向上と共に作曲家、音楽様式など様々な角度から曲を分析して演奏出来るようにすることを目標としている。

2. アンケートからみる学生の現状と成果について

2017年度前期6月21日～7月5日にかけて、常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻の学生41名を対象にアンケートを行った。内訳は、1年生10名、2年生10名、3年生11名（声楽専攻7名、ピアノ専攻4名）、4年生10名（声楽専攻6名、ピアノ専攻4名）である。このアンケート結果から、3、4年生の学習の経過と現状、意識、課題について論じる。

まず、旧カリキュラムで学習している3、4年生のみを対象に、設問4「大学在学中に授業内で学習したピアノ曲を書いてください。」と問うたところ〔図1〕の回答が得られた。

[図1] アンケート設問の4回答結果



3年生4年生とも、1年次では前期エチュード、後期古典派という課題であったが、ピアノ演奏の要となる音楽技術を習得するエチュードの取り組みが非常に多いことが示された。試験の課題はエチュード1曲であったが、複数のエチュードに取り組んでいる学生もあり、試験課題とは別に基礎力向上のため1年を通して練習曲に取り組んでいることが明らかになった。

2年次では、1年次での課題を解決すべく引き続き指導を行いつつ、前期バッハ、後期はロマン派の曲を試験課題として学習する。試験課題以外の曲にも取り組むなど、音楽技術の向上に意欲的な学生が見られる一方、初めてバッハやロマン派作品に取り組む学生もあり、4年間のピアノ演奏の学習のなかでも非常に重要な課題を学習する学年である。

3年次では引き続き前期でバッハが課題となり、より深い技能習得に取り組む。後期は自己の深めたい技術や表現を課題として自由曲の選択となった結果、近代の曲を選択する学生も出てきた。

4年次では3年次までに習得した総合的な音楽技能を基として卒業試験のプログラムを決定した結果、ロマン派と古典派を選択。プログラムを演奏する上での知識、技術を補強する楽曲も同時に取り入れ、音楽技能向上に取り組む姿勢が見られる。

また、1年次から4年次を通して、バロック、古典派、ロマン派の作品については、ほぼ学習がなされているが、近代、現代作品の学習にまでたどりついていない学生が多いことが課題として挙げられる。中等音楽教員には、鑑賞などでも幅広い知識と多くの楽曲の特徴を理解していることが求められるため、近代以降の作品にも触れられることが望ましいと考えられる。

次に設問5「大学でのこれまでにピアノ学習を通して上達した、深まったと思うことにを付けてください。」との問いで「表2」の結果が得られた。

[表2] アンケート設問5の回答結果

設問	3年	4年
<input type="checkbox"/> 指のテクニック	5人	7人
<input type="checkbox"/> 譜読みのはやさ	1人	4人
<input type="checkbox"/> 初見演奏能力	0人	4人
<input type="checkbox"/> 各時代や作曲家についての知識	1人	4人
<input type="checkbox"/> 曲の形式や構成、内容の理解	7人	6人
<input type="checkbox"/> 和声や調性などの理論的知識	4人	2人
<input type="checkbox"/> それぞれの時代にふさわしい演奏表現	0人	4人
<input type="checkbox"/> 多彩な音色で奏でること	2人	5人
<input type="checkbox"/> 音楽性	0人	0人
<input type="checkbox"/> 楽曲の特徴をとらえた表現	5人	6人
<input type="checkbox"/> ピアノ伴奏の技能	1人	7人

3年生4年生とも、「指のテクニック」が上達したと感じた学生が多数を示した。これはピアノ演奏の基本である練習曲を学習した成果であると考えられる。また「曲の形式や構成、内容の理解」についても多数が深まったと感じており、2年次を終え、選択する曲の幅が広がった成果と考えられる。4年生では古典から近現代までの広い年代の曲を学習したことにより、「作曲された時代にふさわしい楽曲の特徴をとらえた演奏表現」、「多彩な音色で奏でること」など、ピアノ演奏に関して自己の深まりを感じている。

また、設問6「中学校・高等学校音楽科教員に必要とされているピアノ演奏技能とはどんなことだと考えますか？」の問いに[表3]の結果が得られた。

[表3] アンケート設問6の回答結果

1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・初見能力・生徒の状況に応じて対応出来る ・伴奏技術 ・生徒も状況に応じて対応出来る ・コードネームでの伴奏 ・弾き歌いが出来る
2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・初見能力 ・指導しながら弾く伴奏技術 ・弾き歌い ・譜読みの早さ ・曲の形式理解と表現力
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・譜読みの早さ ・初見能力 ・即興演奏 ・移調奏 ・伴奏技術 ・クラスの状況に応じての対応と生徒の様子を把握する ・自分の演奏のコントロール
4年生	<ul style="list-style-type: none"> ・初見視奏 ・譜読みの早さ ・弾き歌い ・多様な曲が弾ける ・クラスに合わせた伴奏の対応 ・音楽における楽典などの知識 ・伴奏技術 ・コードネームでの伴奏 ・生徒の音楽性を引き出す多様な音楽表現

3年生4年生とも多数が譜読みの早さ、初見能力、伴奏技術等、中学校音楽教育に不可欠な演奏技術の必要性を挙げている。4年生では楽典やコードネームの知識、クラスに合わせた伴奏の対応、生徒の音楽性を引き出す音楽表現法など、演奏技術だけでなく表現法、指導法が加わってくる。これは教育実習を経験した実体験によりその必要性をより感じた結果と考えられる。

さらに、設問7「現在ピアノ演奏をする上で、ご自身の課題だと思っていることを教えてください。」の問いに対し、[表4]の結果が得られた。

[表4] アンケート設問7の回答結果

1年生	・譜読みの遅さ ・指のテクニック ・初見能力 ・表現力 ・基礎が出来ていない
2年生	・譜読みの遅さ ・曲に関する理解力 ・表現力 ・技術向上 ・基礎の確立 ・音楽理論の知識
3年生	・譜読みの遅さ ・演奏技術 ・表現力 ・人前で弾くことの苦手意識 ・脱力、指使いなどの基礎技術 ・音楽理論の知識
4年生	・譜読みの遅さ ・初見能力 ・読譜力 ・技術向上 ・曲の分析と理解 ・暗譜力 ・表現力

3年生4年生とも譜読みの遅さ、読譜力、技術向上と演奏技術の基礎が課題であると考えている学生が多い。4年生では表現力、曲の分析と理解など音楽内容についての課題が加わっており、中学校音楽教育において幅広い音楽技能の必要性を感じている。良い音楽を聴かせることが音楽教育の重要な一部であると自覚してきたことは、4年間の音楽演習の成果と考えられる。

3. 考察

各期15回の授業において、主科30分副科15分のピアノ演奏実技の個人レッスンで中学校音楽教員が必要とするピアノ演奏技能を習得することは、容易なことではない。ピアノ演奏技能の習得には、根気よく繰り返し練習を行う必要があり、授業以外での練習時間を学生は自主的に取ることが望ましい。しかし、他教科でも課題の多い学生には困難であることが常に教える側の課題として挙がっている。入学時でのピアノ演奏技術の差もあるが、多少難易度の高い課題であっても習得に意欲を見せる学生がみられるのは、個人レッスン指導により中学校音楽教育に必要な音楽技能の重要性を認識してきたからだと言える。

4年次において音楽基礎技術が課題と考えている学生が見られたが、2016年度からの新カリキュラムにより、さらに音楽技能を深めるレッスンのあり方を常に模索し、中学校音楽教育の現場で実践力としてピアノ演奏が出来るように指導しなければならない。
(稲田礼子)

Ⅲ 2017年度からの取り組み

1. 授業内容

①旧カリキュラムとの比較

旧カリキュラムでは、1年前期は隔週、後期は毎週一人20分の個人レッスンが行われていたが、新カリキュラムでは個人レッスンは行われず、前期は小学校免許状取得のための必修共通科目である「音楽IA」後期は選択科目である「音楽IB」という集団授業を受講し、歌唱共通教材を用いたコード付け伴奏の技能を学習する。音楽IA、IB授業は、集団での授業ではあるが、二名の教員によって個人指導を行う時間を設けており、学生それぞれの習熟度にあわせて指、腕や手の使い方や、曲の特徴にふさわしい表現について指導を行っている。2年次からは、独自のテキストを使用し、本格的なピアノ演奏能力を高める授業が開始される。授業は1クラス4人で行われ、個人レッスンを主に進めるが、他の学生にも共通して指導できることや、解説などは集団に対して行う。3年次にピアノ専攻か声楽専攻を選択するところは旧カリキュラムと変わらないが、3年次以降の授業では、1コマの時間を4人で分配し、曲の難易度、学生の授業までの練習や取り組みによって、臨機応変に対応する。4年次では旧カリキュラムと同様に、今まで培った表現技能を生かし、大学4年間の集大成としてふさわしい楽曲をテキストの枠にとらわれずに選曲し、1年かけて楽曲研究と演奏研究に力を注ぎ、卒業試験及び卒業演奏会でその成果を発表する。

②テキスト導入について

本年度、新カリキュラムの第1期生である2016年度入学生が2年生になり、4月より本格的なピアノ学習の授業が開始された。2年次からの新授業では、山崎正監修、明和史佳編著「中等音楽教員養成のための ピアノ演奏表現・技能の実践 グレードI～IV」2017年 篠原印刷出版部」を使用する。

このテキストはグレードI～IVで構成され、バロック、古典派、ロマン派、近代の4つの歴史区分に分かれて作品が収録されている。

[表5] 各グレードに収録されている楽曲一覧

	グレードI	グレードII	グレードIII	グレードIV
バロック	・J.S. バッハ「インヴェンション(2声)」	・J.S. バッハ「シンフォニア(3声)」	・J.S. バッハ「平均律クラヴィーア曲集I巻より フーガ」	
古典派	・ソナチネ ・ソナタ(ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン)	・モーツァルト「ソナタ」 ・ベートーヴェン「ソナタ」		
ロマン派	ツェルニー「30番練習曲」		・シューベルト「即興曲」	
(前・中・後期)		・ショパン「ワルツより」 ・メンデルスゾーン「無言歌集より」	・ショパン「幻想即興曲」 ・シューマン「幻想小曲集より第2曲飛翔」	・ショパン「スケルツォ第1番」 ・メンデルスゾーン「ロンドカプリチオーソ」 ・ブラームス「ラプソディー」
			・チャイコフスキー「四季より」	
近代			・ドビュッシー:「子供の領分より」	・ラフマニノフ「前奏曲より」 ・ラヴェル「ソナチネ」 ・カバレフスキ「ソナタ第3番」

また、テキストでは、次の[表6]のように各グレードにおいて、その特徴と習得を目指す表現・技能が明らかにされている。

[表6] 各グレードの特徴と、習得を目指す技能、学習内容

グレードⅠ
<p>ピアノ演奏に必要な基礎的なテクニックを身につけ、全ての音を美しく意思をもって演奏できるようにする。ツェルニーのエチュード、バロックと古典派の作品を取りあげ、基礎的な形式や構成を理解し、各時代にふさわしい演奏表現や作曲家の特徴をとらえた演奏表現について追求する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一音一音はっきり打鍵し、美しい音で奏でる ・基本的なアーティキュレーションの理解と表現 ・ポリフォニー（2つの独立した声部をそれぞれ歌い上げる）の理解と表現 ・ホモフォニー（1つの声部が主旋律を受け持ち、他の声部はそれを和声的に伴奏する）の理解と表現 ・ソナタ形式の理解と表現
グレードⅡ
<p>バロックでは3声のシンフォニアや、より内容の濃い古典派ソナタを取り上げ、さらなるテクニックの向上を目指すとともに、曲全体の構成を表現しまとめることを主に学習する。また、初歩的なロマン派作品を導入し、曲想を大切に抒情的な演奏表現について追求するとともに、多彩な音色を奏でられるよう演奏技術を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多彩な音色を表現し、細かいパッセージも繊細に美しく弾くテクニックを身につける ・3声による楽曲の理解と表現。また、3声部それぞれを独立して歌うように演奏するためのテクニックの習得 ・内容、構成がより充実した古典派ソナタの理解と表現 ・ロマン派作品の理解と表現
グレードⅢ
<p>ピアノという楽器の可能性を最大限に生かしたロマン派の作品に取り組む。さらに技巧的テクニックを要するため、根気強くその上達に力を注ぐとともに、形式や構造を理解し、より深い情緒的表現を追求する。また、各作曲家の特徴をとらえ、ふさわしい表現方法を追求する。さらに、印象派の初歩的な作品を取り上げ、印象派の特徴と表現方法について学習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技巧的なテクニックの鍛錬 ・各作曲家の理解と表現・曲全体の流れや構成の理解と表現 ・印象派作品の理解と表現
グレードⅣ
<p>ロマン派作品の中でも5分以上で内容、構成ともにより充実した作品に取り組む。より高いテクニックと音楽性、構成力を必要とする。また、近代印象派の音楽とロシアの音楽を導入し、近代の音楽について理解を深めるとともに、各曲の表現方法について追求する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・規模が大きな楽曲をまとめるために必要な高いテクニックと表現力、構成力の習得 ・それぞれの時代、それぞれの作曲家の特徴をとらえた表現 ・音楽的大作を演奏することを目指し、より豊かな感性と、音楽性あふれる表現力の向上

学習者はこれまでのピアノ学習経験を踏まえ、それぞれの習熟度に応じたグレード集を選択、2年次から3年次前期までの3つの授業を通して段階的に演奏テクニックや演奏表現の上達を図り、最終的にグレードⅣの曲集に到達することを目指す。各グレードには「習得を目指す技能」について記されているため、何を学ぶべきか学生自身が認識することでより効率的、かつ、目標を持って学習に取り組むことができる。さらに、大学以前の学習経験も含めて、4つの歴史区分全ての楽曲を取り組めるよう計画的に課題を選択することで、時代による演奏表現の違いや、楽曲の特徴を理解し

それぞれにふさわしい演奏表現を学習することを目指す。テキストには、その曲が作曲された時代背景や、作曲家と作品についての解説と、学習の留意点が添えられており、演奏に必要な知識を学べるようになっている。グレードをレベルアップさせつつ、全ての歴史区分の楽曲を学習することにより、中等音楽教員に必要なピアノ演奏テクニックと、深い音楽知識、豊かな表現力や音楽性を身につけることが、このテキストのねらいである。

旧カリキュラムの授業では、1年次から3年次までの各ピアノ学習の授業でそれぞれに共通した試験課題を定めており、基礎からロマン派までの作品を取り扱い、全受講生がその課題を深く学習し、理解・表現することで、教員に必要とされるピアノ演奏表現・技能を一律に習得するよう構成されていた。一方、新授業においては、テキストの中から自由に試験課題を選択し、個人の状況に沿った学習計画を立てて授業を進めるため、入学時に演奏能力にばらつきがある本学では、学生それぞれの表現技能を効率的に伸ばす効果があると考えられる。また、旧カリキュラム授業での課題曲選択では、学生の強い希望により、かなり難易度の高い楽曲や、自分の好みが反映された偏った楽曲を選択したり、どんな技能を身につけるべきか認識していない学生がみられた。しかし、このテキストでは、課題曲が掲載されている理由が示されているため、身につけるべき表現技能を学生自身が理解し、ふさわしい楽曲を選択しやすい。また、テキストに頼りきりになることで多くの楽曲に触れる機会が減ったり、見識が狭くなることを防ぐため、テキスト以外の楽曲を副教材として用いたり、特定の技能の習得不足を補うためのエチュードなどを適宜用いることとしている。さらに、3年次後期では、テキストの枠にとらわれないで楽曲を選択し、自身で楽曲分析を行うとともに、さらなる演奏表現・技能の上達を目指す。新カリキュラムの授業では、このグレード別テキストを使用することで、自分がどのような楽曲に挑戦し、どのような技能や表現を上達させたらよいか認識し、それぞれが目標をもって学習に取り組むことで、効果的に演奏技能が上達し、演奏表現が深まることを目指している。テキストをより効果的に使用するためにも、個々に沿ったきめ細かい指導を行っていく必要がある。

(明和史佳)

2. 学生アンケートから見る、大学授業開始時の学生の基礎力

本項では、I章の2に記した音楽専攻の学生41名を対象学生アンケートで、学生の大学入学以前のピアノ学習の経験について調査し、授業開始時、学生がどのくらいのピアノ基礎力を身につけているか考察する。

[表7] 2017年度前期音楽専攻学生対象 器楽（ピアノ）学習に関するアンケート
設問1～3

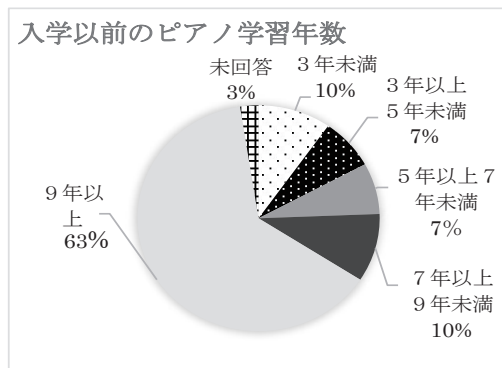
1	大学入学以前のピアノ学習経験はどのくらいですか？
2	<p>次の曲集または楽曲のうち、大学入学以前に学習したことがあるピアノ曲（又は曲集）に<input checked="" type="checkbox"/>を付けてください（曲名に関してはわかる範囲で回答してください）</p> <p><input type="checkbox"/>音楽教室の教本 <input type="checkbox"/>バイエル <input type="checkbox"/>バスティーン <input type="checkbox"/>トンプソン</p> <p><input type="checkbox"/>ブルグミュラー <input type="checkbox"/>チェルニー 30 番 <input type="checkbox"/>チェルニー 40 番 <input type="checkbox"/>チェルニー 50 番 <input type="checkbox"/>モシュコフスキー練習曲集 <input type="checkbox"/>クラマー＝ビューロー練習曲集 <input type="checkbox"/>ソナチネアルバム <input type="checkbox"/>ソナタアルバム <input type="checkbox"/>プレインヴェンション <input type="checkbox"/>インヴェンション（2 声） <input type="checkbox"/>シンフォニア（3 声）</p> <p><input type="checkbox"/>ソナタアルバム収録以外の古典派ソナタ [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>シューベルトの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>ショパンの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>シューマンの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>メンデルスゾーンの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>ブラームスの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>グリーグの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>ドビュッシーの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>チャイコフスキーの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>ラフマニノフの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>プロコフィエフの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>バルトークの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>カバレフスキーの作品 [曲名：]</p> <p><input type="checkbox"/>その他 [曲名：]</p>
3	これまでに発表会やコンクールなど、舞台上（人前で）ピアノを演奏した経験がありますか？（試験は除く）

アンケートの結果、設問1「大学入学以前のピアノ学習経験はどのくらいですか？」の問いに9年以上が63%と最も多く、次いで7年以上9年未満、3年未満がそれぞれ10%、3年以上5年未満、5年以上7年未満が7%であった。（未回答3%）

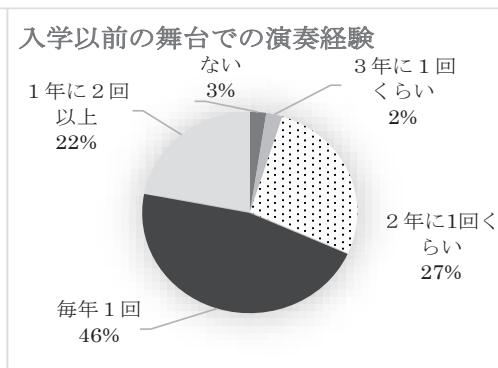
また、設問3「これまでに発表会やコンクールなど、舞台上（人前で）ピアノを演奏した経験がありますか？（試験は除く）」の問いには、毎年1回が46%、次いで2年に1回が27%、1年に2回以上が22%、無しが3%、3年に1回が2%であった。

この事から、全体の73%が7年以上の学習経験があり、68%が毎年ステージでの演奏をしており、約70%の学生が大学入学前にも音楽経験を積んでいることが分かった。

[図 2] 設問 1 回答結果



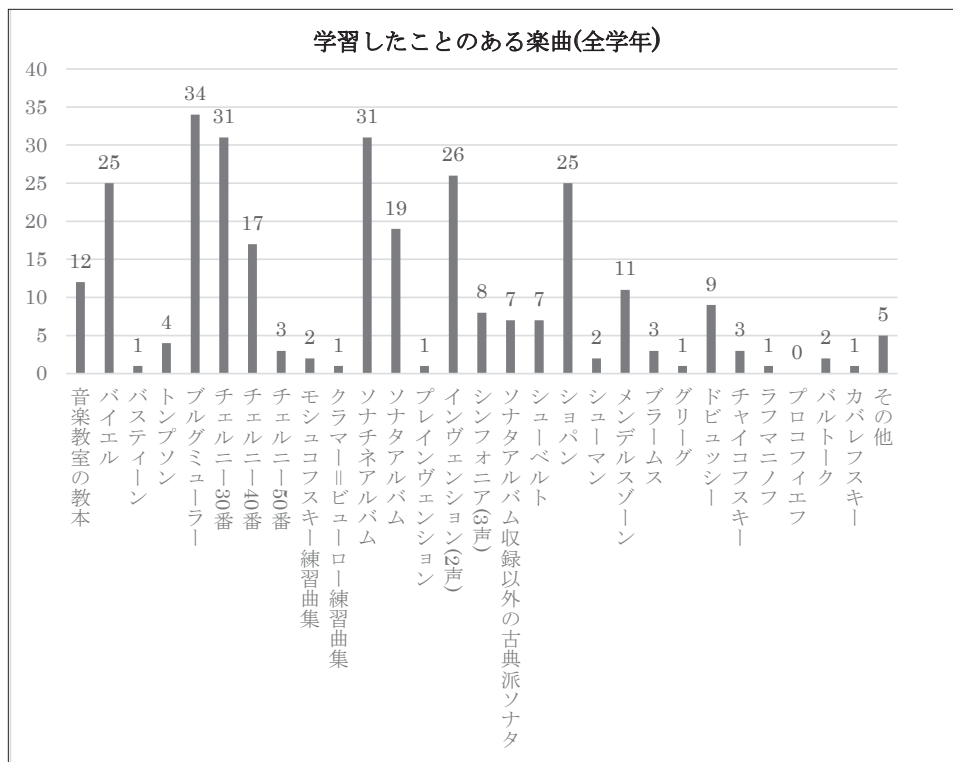
[図 3] 設問 3 回答結果



設問 2 では、大学入学までに学習したことのあるピアノ曲についての調査を行った。アンケートの結果より、大学入学までに学習したピアノ曲では、ブルグミュラーが 34 人と一番多い回答が得られた。次いでチェルニー 30 番、ソナチネアルバムが共に 31 人、インヴェンションが 26 人、バイエルが 25 人と回答を得た。初歩の教則本を経て、より進んだテクニックや音楽性を身に付ける練習曲集として、ブルグミュラー、チェルニー 30 番を学習した経験のある学生が多いと考えられる。また、本学の入試課題曲として、ソナチネを学習している学生も多い。インヴェンション、バイエルも基礎的な技術、音楽性を身に付ける為の曲集である。ロマン派における作曲家では、ショパンの作品が 25 人と一番多い回答が得られた。具体的な曲名としては、ポロネーズ、ワルツ、エチュード、ノクターン等である。ロマン派の作曲家の中でもピアノの作品の比率が高く、演奏会やメディアを通して触れる機会の多いショパンは、日本においても大変人気が高く、基礎の段階からピアノ学習者の中でも取り上げられる機会が多いと考えられる。しかし、メンデルスゾーンが 11 人、シューベルトが 7 人、ブラームスが 3 人等、他のロマン派作品を勉強している学生は決して多いとは言えない。近現代の作品に関しては、ドビュッシーが 9 人と一番多かったが、チャイコフスキーが 3 人、バルトークが 2 人、ラフマニノフ、カバレフスキーが 1 人と、学習している者がさらに少ない。そのうち回答のあった曲目は、子供の領分・アラバスタ・月の光（ドビュッシー）、子供のために（バルトーク）等であり、近現代の作品とはいえ、機能と声を用いられた作品であり、ピアノの技巧としても決して難易度の高い作品ではない。より高度で複雑な知識と技術を要求される事も多い近現代の作品に関しては、馴染みが薄い事が分かる。

音楽科教育の目標である、「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。」ことを目指すのであれば、様々な時代区分における音楽への理解を深め、それぞれの作曲家、作品でふさわしい表現を掴める力をつける必要がある。より広い時代区分、形式等に対する認識・知識を持ち、時代様式に合わせた音楽表現を学習することが課題になるであろう。

[図 4] 設問 2 の回答結果



3. 指導のポイント

2017年度からの取り組みとして、山崎正嗣監修・明和史佳編著(2017)「中等音楽教員養成のためのピアノ演奏表現・技能の実践 グレードI～IV」を用いた授業が始まった。本書は中学校、高等学校の音楽教員に必要なピアノ演奏の表現技能を効率的かつ効果的に身につけることを目指し作成され、授業内では、それぞれに合わせた選曲、試験曲の選定を行い、次のように指導を行った。

[譜例 1] ハイドン ピアノソナタ Hob.XVI:35 第1楽章 8、9小節

ホモフォニーでの分散和音による伴奏音型

[譜例 2] ツェルニー 30 番練習曲 第 7 番 1、2 小節

アルベルティバスの上達
を目標とした練習曲

大学入学以前の学習進度は様々であり、バッハの作品を多く勉強してきたがそれ以外の作品は勉強していなかった学生や、初歩の教本までしか触れておらず、ピアノの作品に対してあまり興味関心を抱いていない学生、意欲的に近現代作品まで勉強してきた学生もあり、まずはそれぞれに合わせた選曲と、それに伴う課題に取り組んだ。

古典の作品を勉強したことのない学生に対しては、グレード I よりハイドンのピアノソナタ Hob.XVI:35 第 1 楽章 [譜例 1] を選曲した。音楽教員に必要なピアノ演奏の技能として、伴奏付けは大きな割合を占めると考えられる。古典派のソナタを勉強することにより、一つの声部が主旋律となり、他声部にて和声的な伴奏を受け持つホモフォニーの形態を身につけ、音楽教員としてより実践的な学習をすることが出来るであろう。技術的な課題としては、古典派作品によくみられる伴奏音型の「アルベルティバス」を、安定して弾けることが課題の一つとなる。授業の中で、学生自らの希望により、アルベルティバスの技術的な上達を目標として、ツェルニー 30 番練習曲より第 7 番 [譜例 2] に取り組む意欲もみえ、楽曲に必要な技能を分析する力、苦手な面の克服に対する努力を感じさせる学生もいた。また、大学入学以前にピアノの学習経験が少なく、初歩の教本までしか触れたことのない学生に対しては、グレード I より、J.S. バッハのインヴェンション第 1 番、クレメンティのソナチネ Op.36-6 第 1 楽章を同時に選曲した。グレード I に収録されている 2 つの時代区分(バロック、古典派)のうち、学生の能力に応じてそれぞれから一曲ずつ選曲し、個々にあった細やか指導をすることによって、グレード I で示された「習得を目指す技能」(目標)である「ピアノ演奏に必要な基礎的なテクニックを身につけ、全ての音を美しく意思をもって演奏できるようにする。」ことの実現に近付くことが出来た。また同時に、「主な学習内容」のうち・一音一音はっきり打鍵し、美しい音で奏でる・基本的なアーティキュレーションの理解と表現・ポリフォニー(2つの独立した声部をそれぞれ歌い上げる)の理解と表現・ホモフォニー(1つの声部が主旋律を受け持ち、他の声部はそれを和声的に伴奏する)の理解と表現・ソナタ形式の理解と表現、において大きな成果が得られた。

一方、これまでにバロック、古典派ソナチネ以降の作品も勉強してきた学生に対し

では、グレードⅡ、Ⅲからの選曲を行い、指導を行った。グレードⅡからショパンのワルツ Op.64-2 を選曲した学生に対しては、演奏技術のみならず楽曲の背景を探ること、ワルツにおいて重要である3拍子の拍感の習得、ロマン派におけるフレーズの処理の仕方、高度に要求されるペダリングの習得、ハーモニーによる音色の変化を中心に指導を行った。また、Tempo giusto - Più lento - Più mosso - Tempo I - Più mosso と曲中に指示のあるテンポの変化・構成についても統一感を持たせ、より説得力のある演奏を目指した。グレードⅢからシューベルトの即興曲 Op.90/D899-2 を選曲した学生もあり、弱音における粒の揃った指先でのタッチの習得、指だけでなく肘や腕を柔らかく使うフォームの習得、同一のダイナミクスにおける中でのアーティキュレーションによる繊細な音色の変化、細かなペダリングの技術（ハーフペダル、ヴィヴラートペダル、アクセントペダル等）等を課題に取り組んだ。

全体的な傾向として、読譜に必要な楽典の知識、基礎的な技術も備わっており、与えられた課題や練習に対しては真面目に取り組む学生が多かった。当たり前ではあるが、授業にも欠席することなく参加し、多くの者が音楽教員として必要である素質を持っている。一方、自分の専攻する「音楽」を広く捉え、自ら進んで研究を深めていこうという独創性には少し欠ける傾向が見受けられた。楽譜を正しく読み、ピアノを弾くことだけで満足するのではなく、作曲家がどのような意志を持って作品を残したのか、一つ一つの音にはどのようなメッセージが込められているのかをあらゆる角度から考察する等…音楽作品を勉強するうえで、作品の背景を探り、音に対するイメージをすることはとても大事なことである。

「ピアノの学習を通し、音楽の歴史や作曲家についての知識を身につけ、演奏技術の上達と楽曲表現の追求に力を注ぐことにより、表現することの喜びや音楽の素晴らしさを実感し、音楽の魅力を伝えられるようになることを目指す。教員自身が演奏することの喜びや楽しさを感じずに、伴奏や指導を行ったとしても生徒が音楽の魅力を感じることはできない。したがって、教員養成機関におけるピアノの学習は、素晴らしい演奏表現を目指すことによって、音楽教員として最も重要な「資質」を育成することを目指している。」山崎正嗣監修・明和史佳編著(2017)「中等音楽教員養成のためのピアノ演奏表現・技能の実践 グレードⅠ～Ⅳ」で記されているように、自ら音楽の魅力を発見し、他者にもその魅力を伝えられる能力を持つことは、授業においての大きな目標である。我々教員においても、学生と向き合う中で課題を克服するヒントを与えると共に、音楽に携わる者として必要である探求心を失わず、良き模範としても接していくことが必要であると言えよう。

(海瀬京子)

IV. ピアノ伴奏技能の育成

中等音楽教員に必要とされるピアノ演奏能力の中でも最も重要なものの一つに、ピアノ伴奏の能力が挙げられる。多くの都道府県教員採用試験の実技試験で歌唱共通教材の弾き歌いが課されており、学習指導要領第1目標(3)にある「音楽活動の楽しさを

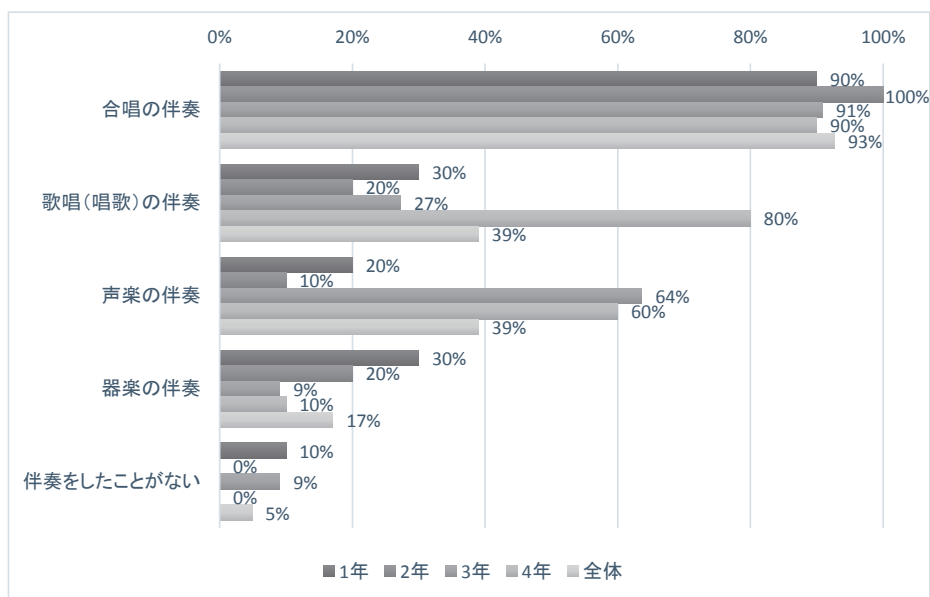
体験することを通して、音楽を愛好する心情を育む…（後略）」を実現させるために最も密接な関わりを持つ能力であると考えられる。実際の教育現場で、教員が合唱や歌唱、器楽の伴奏を行う場面はかなり多く、これらは直接的に生徒が音楽の楽しさを実感し、音楽の魅力や芸術に対する造詣を深めることができる貴重な機会である。教員自身が音楽性豊かな演奏をし、アンサンブルの楽しみや、表現することの喜びを生徒に味わわせることが音楽教員には求められる。

1. 学生アンケートから見る、学生の現状とピアノ伴奏に対する意識

Ⅱ章、Ⅲ章で述べた学生アンケートにより、伴奏経験の有無を調査したところ。次のような結果が得られた。

以下の〔図5〕は設問8、「これまでどのような演奏のピアノ伴奏を行ったことがありますか。」の問いに対する回答である。

〔図5〕 アンケート設問8の回答結果

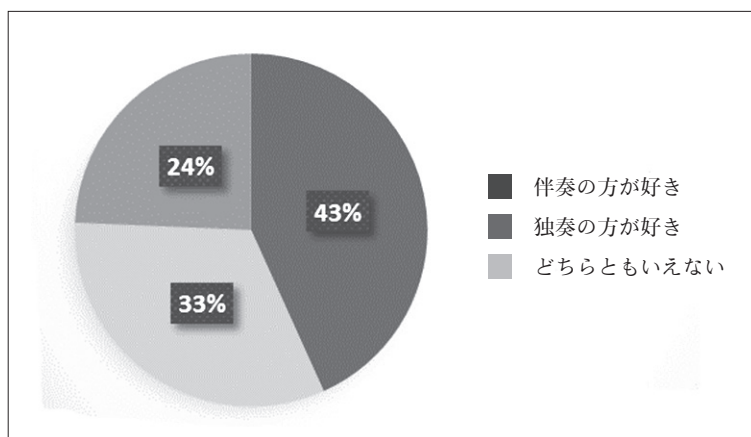


〔図5〕の結果から、93%もの学生に合唱の伴奏経験があることがわかった。これは、学生自身が中学生、高校生の時に音楽の授業や合唱コンクールなどの行事で伴奏経験がある他、大学での授業、部活動、サークル活動などでも合唱伴奏を行っているからだと推測できる。次に歌唱と声楽の伴奏であるが、3、4年生になるとその伴奏経験がある学生は増えるものの、全体でも39%と半分に満たないことがわかった。さらに器楽の伴奏に関しては全体で17%となかなかその伴奏の機会を持たないことが明らかになった。2015年度入学生までの音楽専攻授業カリキュラムでは、伴奏を学ぶ

機会が3年次の「合奏及び伴奏指導法 B」の中の5回の授業しかなく、学生たちは声楽の授業の伴奏を同級生や先輩から依頼され、自主的に行っていることが多い。したがってそれぞれが受け持っている伴奏に対するしっかりとした指導を受けることはなかった。また、ピアノに苦手意識を持っている学生は自主的に伴奏を引き受けようとはしないため、伴奏そのものの経験が少なくなってしまう傾向にある。こういった現状から、2016年度入学生からの新カリキュラムにおいては、3年次に「伴奏法」の授業を配置し、15回の授業の中で、中学校音楽の歌唱共通教材から、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、日本歌曲、合唱にいたるまで学習することとした。音楽活動の中核とも言える「歌う」という活動をより豊かにするピアノ伴奏の技能を身につけることを目標とし、2016年度入学生が3年生になる2018年度より授業を開始し、その様子を見極めていきたい。

さらに、上述のアンケートにより、伴奏に対する意識を調査したところ、設問10.「ピアノ伴奏とピアノ独奏を演奏するのではどちらが好きですか?」と、設問11.「上記の好きな理由を書いてください。」の問いに次のような回答が得られた。

[図6] アンケート設問10の回答結果



[表 8] アンケート設問 11 の回答結果

伴奏の方が好きな理由	独奏の方が好きな理由
<ul style="list-style-type: none"> ・全員でつくり上げるほうが好き、楽しいから ・伴奏で一人で練習してそれから歌などに合わせてみて曲が出来上がった瞬間が嬉しいから ・合唱のきれいなハーモニーを聴きたいから ・他の人とコミュニケーションをとりながら表現することを助けるということが楽しいから ・誰かと演奏することが楽しいから ・アンサンブルが大好きだから ・一緒に表現をつけていくことが好きだから ・興味がわくから ・歌のメロディーと上手く組み合わせるようになっているので弾いていて楽しいから ・弾けると学校教育現場で便利だから ・一体となっているかんじが良い ・独奏は自信がないから ・独奏の経験が少ないから 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなように弾きたいから ・自分の実力がわかるから、自分次第だから ・伴奏だと相手に迷惑をかけてしまうから ・指揮者と合わせることが難しいことを中学校の合唱伴奏で感じたから ・人に合わせなくてよいから ・自分の音楽性を自由に表現できるから ・自由に弾けるから ・自分の演奏だけを聴いてもらえるから ・自分を表現しやすいから
	<p style="text-align: center;">どちらともいえない理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両方とも良さがあり好きだから ・伴奏として合わせるのも、独奏で自由に弾くのも好きだから

設問 10 に対し、「伴奏の方が好き」と答えた学生は 43% であるのに対し、「独奏の方が好き」と答えた学生は 33% であり、若干であるが伴奏の方が好きという学生の方が多結果となった。好きな理由をみても、「他者と演奏することが楽しい」、「アンサンブルが好き」といった回答があり、ピアノ伴奏に関して非常に前向きな感情を持っている学生がいることがわかる。一方で、「伴奏だと相手に迷惑をかけてしまう」といった、自身の演奏技能・表現に不安を持っている回答もあり、他者と演奏することの楽しさや、協働して音楽を表現する喜びを実感できるよう取り組んでいかなければならない。

2. 伴奏に求められる表現・技能

同アンケート設問 9. 「ピアノ伴奏とピアノ独奏をする上で、演奏の違いは何だと思いますか？」では、次のような回答が得られた。

[表 9] アンケート設問 9 の回答結果

伴奏	独奏
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が主役ではない ・引き立てるような役目を持つ ・自分が前に出てはいけない ・相手がやりやすいように導く ・相手に合わせる ・自分の音以外のものを良く聴き演奏しなければいけない ・主な演奏者の邪魔にならないよう音量を考える。 ・歌う人や演奏する人に合わせて表現を工夫する ・演奏者の表現したいことを感じ取り、表現を引き出す ・主を盛り上げたり、支えたりする ・ペースを意識する ・相手と音楽を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が主役 ・自分を魅せる ・自分が前に出る。 ・自分の成果を見せる ・自分がどのように弾きたいのかを伝える ・ひとりで（ピアノだけで）表現を工夫する ・表現力と技術が試されるもの ・メロディーを意識する

このアンケート結果をふまえ、学生が持つ課題や、各伴奏の指導ポイントについて考察する。

＜独唱・独奏の伴奏＞

アンケート結果でも、伴奏とは「引き立てるもの」、「主役ではない」という回答がみられるように、伴奏は目立たないように演奏しなければならないものだと考えている学生が非常に多い。そんな意識から、前奏や間奏といったピアノのソロパートでも、曲の特徴や曲想を生かした演奏ができなかったり、「歌より強くなってしまうのが怖い。」と言って音の強さにばかりこだわり、美しい音の響きや、多彩な音色で演奏することがおろそかになっている学生の伴奏を目にすることも多い。アンケートで「主な演奏者の邪魔にならないよう音量を考える」という回答があるように、どうしても伴奏＝脇役というイメージが刷り込まれてしまっているようである。もちろん、主旋律を奏する演奏者の音量に合わせた演奏をしなければならないが、曲想に関わらず全体を弱く奏し、デュナーミクのない演奏になってしまったり、消極的なアゴーギグの表現になってしまうのでは、音楽性、表現力のない、機械的な伴奏となってしまう音楽の真髄から離れてしまう。伴奏は相手の意思を感じ取った上で、主体的に表現する、という多角的なとらえ方ができなければならない。

ピアノという楽器は、旋律と伴奏を一人で奏することができるという点が、大きな特徴かつ利点である。しかし伴奏の場合、主旋律は他の演奏者が演奏することが多いため、伴奏者は音楽の要である主旋律を実際には弾かず、想像のみで音楽を作っているかなければならない。したがって、伴奏の譜読みをする際に、自身のパートのみ弾けるようにするのではなく、主旋律―すなわち他の主演奏者の旋律―も読み込まなければならない。この曲全体をとらえる譜読み能力は、中等音楽教員にとって非常に大切な技能であり、例えば指導の際、伴奏を弾きながら主旋律を弾いて生徒が音程をとりやすいように助けたり、伴奏を弾きながら右手で指揮をし、旋律を歌うなど臨機応変

な指導につながるものである。

また、ピアノ独奏は楽器の構造上、右手で旋律、左手で伴奏を奏することが圧倒的に多く、どうしても右手を強く左手を弱く弾く感覚が自然と備わってしまっている。[譜例3]のように独奏では旋律を担当している右手が、伴奏ではハーモニーを担当し最も弱く繊細に奏するべきパートとなり、独奏では伴奏部分を担当している左手が、伴奏では最も大切なベースラインを奏するパートとなる。

[譜例3] 夏の思い出 2小節～3小節（「中学生の音楽2・3上」より）

和音の響きを受け持つパート
最も弱く繊細に奏すべきパートであるが、重音があり、動きも多いため音量が強くなってしまいやすい

主旋律を支える、伴奏の中で最も重要なベースライン

普段独奏を練習している者にとってはこの感覚の切り替えは非常に難しいことである。その上、伴奏には前奏や間奏といったピアノソロパートがあり、その部分では再び独奏の弾き方に切り替えなければならない。この感覚の切り替えを習得することによって、すべての音を弱く演奏しなくても、全体のバランスが整い、「相手の意思をくみ取りながらも主体的に表現し、一緒に音楽を作る」ことが可能になる。こういった伴奏特有のポイントを専門的に指導することが、伴奏の技能習得に最も必要なことだと考えられる。

<合唱の伴奏>

ある程度の人数が集まった状態である合唱の伴奏では、指揮者がいることが独唱や独奏、アンサンブルと異なる点であり、指揮者の意思を感じ取り表現することが合唱伴奏の大きな特徴の一つである。指揮者の意思を無視し、自分の解釈や表現を主張して演奏するのは論外であるが、指揮者と伴奏者の二人ばかりが息の合った演奏で、歌い手に意識を向けない伴奏では、複数人で演奏する楽しさや美しさを感じることはできない。逆に、経験があまりない指揮者であったり、生徒が指揮者を務めているなどの場合は、消極的に指揮者の後をついていくような演奏であると、全くまとまらなくなってしまう。アンケート結果では、伴奏は「主役ではない」、「自分が前には出てはいけない」といった意識があるようだが、音楽は演奏者全員で作るものであるので、だれかと一緒に演奏していても、常に自分の意思を持ち自分なりの表現をしなければ、他者と共に演奏することの醍醐味を味わうことができない。指揮者の意図をくみ取り、

歌手手と共に協働して演奏することで、音の重なり的美しさや一体感を感じ、共に演奏する喜びを感じることができるのである。また、教育現場では、指揮者がおらず、教員がピアノを伴奏しながら指導する場合も多い。時に、生徒が元気いっぱい大きな声で歌えるよう、わかりやすい大きな音で演奏しようとするピアノ伴奏を目にすることがある。しかし、ただ大きな声を出せば良いというのではなく、曲想にふさわしい音色や響きで表現豊かな演奏をすることで、曲の特徴や情景を感じ取り、表現することの奥深さを生徒自ら学ぶことができるのである。合唱の伴奏においては、生徒が主体的に考え、協働的に表現することを楽しめるよう導き、支える「指導力」と「包容力」が必要である。

(明和史佳)

V. 全体考察

研究の結果、中等音楽教員に求められるピアノ演奏能力は、年々高くなっており、単に弾き歌いや伴奏が弾ける程度のものではなく、曲の構造や曲の時代背景などを理解した上で、その曲にふさわしい音色、曲想を持って表現できる演奏能力と技術が求められることがわかった。本学の授業を見ていても、ピアノ演奏に苦手意識を持っていたり、実際の教育現場での自身の演奏能力に不安を持っている学生は多い。しかし、中等音楽教員に最も必要なのは、難しい楽曲をいくつも弾きこなすことができる能力ではなく、音楽の素晴らしさ、奥深さを伝えることができる演奏能力である。本学のピアノ学習授業で取り組むことができる楽曲は決して多くはない。しかし、取り組んでいる楽曲から自身の理想とする演奏表現を追求することを学び、技術の上達を目指すことで、着実にピアノ演奏能力の向上を図ることができる。いくら知識があっても、音楽の美しさや楽しさを生徒に実感させられなければ、音楽科の目標は達成されない。ピアノ演奏の学習は、音楽の素晴らしさを伝えることができる音楽教員として「資質」育むことにつながっており、教員養成校ではその「資質」の育成が求められている。

今回の学生アンケートの結果を見ると、基礎力に自信がなかったり、演奏技術や表現力に課題があると答えた学生が多かった。今年度より内容を新たにした、グレード別テキストを用いた授業では、学生自身が習得すべき知識や表現技能を理解し、目標を持って学習を進めることで、これまで自身が学んだこと、習得したことの成果を認識することができると考えられる。また、ピアノ演奏能力の上達には、個々の学生に合わせた個人指導が欠かせない。新授業では、今までのピアノ学習経験をもとに学生それぞれに合った学習計画を立てるため、それぞれの学生の特性を生かした、よりきめ細やかな指導が可能になるであろう。

本年度、グレード別テキストを用いた初めてのピアノ学習授業と試験を終えたが、学生それぞれが自身の目標に向けて熱心に練習に励み、ピアノ演奏表現・技能の向上に大きな成果が得られたと感じる。また、試験では様々な作曲家の楽曲が披露されるため、その表現方法の違いに気づくと共に、それぞれの楽曲の良さを感じ取り、積極的に次の課題に取り組もうとする様子が見られた。グレード別テキストを導入したピ

ピアノ学習の授業は、今年度から始まったばかりである。来年度から始まる伴奏法の授業も含め、今後の学生の様子と課題について継続的に調査・研究していきたい。

(明和史佳)

引用・参考文献・参考資料

- ・山崎正監修、明和史佳編著「中等教員養成のための ピアノ演奏表現・技能の実践
グレードⅠ」2017年 篠原印刷出版部
- ・山崎正監修、明和史佳編著「中等教員養成のための ピアノ演奏表現・技能の実践
グレードⅡ」2017年 篠原印刷出版部
- ・山崎正監修、明和史佳編著「中等教員養成のための ピアノ演奏表現・技能の実践
グレードⅢ」2017年 篠原印刷出版部
- ・山崎正監修、明和史佳編著「中等教員養成のための ピアノ演奏表現・技能の実践
グレードⅣ」2017年 篠原印刷出版部
- ・山崎正監修、明和史佳編著、望月たけ美著「初等教育課程のための鍵盤ハーモニー
入門 改訂版 理論編・実践編」2017年 篠原印刷出版部
- ・小原光一監修、他「中学生の音楽2・3上」平成29年 教育芸術社
- ・中学校学習指導要領 平成29年3月 文部科学省
- ・平成27年度静岡県公立学校教員募集案内・選考試験要項 静岡県教育委員会
- ・平成28年度静岡県公立学校教員募集案内・選考試験要項 静岡県教育委員会
- ・平成29年度静岡県公立学校教員募集案内・選考試験要項 静岡県教育委員会
- ・平成30年度静岡県公立学校教員募集案内・選考試験要項 静岡県教育委員会